

## 地域と連携した実践的な環境教育の推進

申請代表者 中澤朋代

協力者 白戸 洋

## 取組の概要（\* 400字以内）

松本大学の位置する松本・安曇野は豊かな自然に恵まれている一方で、農地の荒廃や開発の進展、都市環境の悪化などの課題に直面している。本取組は、これらの現代的な課題を踏まえ、環境を活かす「人づくり」を行ない、同時に大学が地域に働きかけて、環境を活用した地域社会を創造する。松本大学は、大学教育への現代的なニーズの変化を的確に捉え、様々な教育方法や教育課程、地域との連携などを通じて、学習と体験、実践の相互作用によって、主体性を持って社会に働きかけることのできる人材養成をめざす大学教育のあり方を、環境教育という分野において、モデルとして提起するものである。キャンパスに隣接する豊かな自然環境と地域との連携を活かし、体験と学習を繰り返す学習サイクルに基づき、理論と実践の相互作用によって人材を育てる。さらに、育てた人材が将来、地域で活躍できるよう、学生にはキャリア形成の支援を行なう。

（取組の概要文字数： 388字）

キーワード：人づくり、主体性、地域との連携、理論と実践、キャリア形成

## 申請にあたって

今回の GP 申請は、観光ホスピタリティ学科で展開されるカリキュラムである、環境・福祉・観光の視点から持続可能な社会に向けた「人づくり」を通して、地域で活躍する人材養成をテーマとした。申請にあたっては、松本大学の特徴である、①地域社会との連携、②アウトキャンパス・スタディなどによる実践活動と理論学習を繰り返す教育手法、③地域の求める人材を排出するためのキャリア形成の3点を強調した。具体的には、環境教育のカリキュラムの体系化とそれらの学習を活かした起業や就職などの学生のキャリア形成を通じて、①環境意識を持った社会人、②環境活用型の観光や農業などで活躍できる人材、③指導者や教員、行政職員などの環境教育リーダーやコーディネーターを養成することを提案している。環境を保全するだけにとどめず、環境を活用することで地域社会が発展し、若者が地域に根付き、結果としても環境が保全されるという基本的な考え方に沿って提案をおこなった。

この申請を通じて、教職員間で様々な議論がなされ、特に地域を観光と福祉という視点から発展させていくという観光ホスピタリティ学科における環境教育の方向性が明確になったとともに、これまで個々に取り組みされていた講義やアウトキャンパス、体験学習、地域での実践活動、調査・研究をひとつのシステムとして整理することができた。学科設置以来試行錯誤の中で取り組んできた個々の取り組みが、環境教育の展開の中にきちんと位置づけられたことで、今後さらに充実したものになると期待される。

この申請にあたっては、キャリアセンターの職員のサポートがあり、プレゼンテーションなどについての的確なアドバイスや実際のレイアウトの作成をしていただいた。キャリアセンターの青島金吾課長、中谷聡子さんに感謝するところである。また、その共同作業を通じて、教職員間で多くのコミュニケーションがなされ、異なる視点から日頃気づかないところを多く気づかされるなど、今後の大学のあり方を考える良い機会となった。

## 1 取組について

### (1) 取組の趣旨・目的

#### ◆養成する人材像

本取組は地域密着型の大学教育を展開する松本大学が、地域と連携した実践的な環境教育の推進を通じて、環境を保全し、持続的な地域づくりに貢献する人材を養成するものである。この貢献する人材とは3つのタイプに分けられる。

- ① 環境意識を持った社会人 [全学生対象]
- ② 環境活用型の観光や農業などで活躍できる人材
- ③ 指導者や教員、行政職員等の環境教育リーダーやコーディネーター

①は地域環境について高い関心を持ち、その課題を発見し、自らの課題として、その解決のためのアイデアを提案できる人材であり、全学生を対象として養成する。また、②は、地域の環境を持続的に保全し活用するために必要な具体的な事業や活動を立ち上げることができる人材であり、さらに③は、豊かな人間力を持って多様な人々とのコミュニケーションや、鍵となる人を繋ぐリーダー、コーディネーターとして活躍できる、もしくは自らの判断でそうした活動に関わる人材である。

#### ◆松本大学での先進的な観光教育と地域の課題

自然環境に恵まれた信州の中心に位置する松本大学は、観光ホスピタリティ学科を平成18年度より開設し、安曇野や上高地などの豊かな環境を活かして、地域をフィールドとした実践的な観光の専門教育を展開している。具体的にはエコツーリズムやグリーンツーリズム、滞在型の観光、バリアフリー観光など、豊かな自然や多様な文化を活かし、都市や世界と繋がる新しい観光のあり方を地域と連携しながら追求している。

しかし、今や急激な社会経済的な変化の中で、ここ信州においても環境に関わる様々な地域課題が顕在化しており、地域はまさに崩壊の危機に直面している。

- ① 高齢化や都市化による中山間地などの荒廃や開発の進展による自然環境の悪化
- ② 農業の衰退による農村の荒廃や農地の遊休化
- ③ 地方都市部の環境問題とコミュニティの再生
- ④ 環境保全と開発や経済のアンバランスによる人口の流出と地域の担い手の不足

観光ホスピタリティ学科が扱う「観光」はまさにこれらの課題を解決するために必要な地域ニーズに対応した分野であり、「環境」は持続可能な社会づくりに向けてその土台となる重要な要素である。

#### ◆人材養成の方向性とキャリア形成への取り組み

一方、地域環境に関わり、地域で活躍する人材として学生が抱えている課題は、

- ① 環境に対する意識や経験の不足
- ② 地域の環境や文化伝統を保全し活かす専門的な知識・能力の欠如
- ③ 主体的に関わるために必要な人間性と実践力の不足
- ④ 地域を担うための雇用の機会や暮らしの場が限られている

等があげられる。したがって、本取組では、知識の習得や理解にとどまらない、課題発見・解決能力を養う学習方法を重視し、環境教育を展開する。さらに、持続可能な社会づくりに主体的に参画できる「即戦力」の人材の養成には、大学内での人材養成にとどまらず、常に地域と連携して実践的な活動を展開することを通じて、地域の課題解決に直接的に取り組むことが重要である。また、本取組では、大学での環境教育の成果を地域に還元すべく、育成した人材が社会で活躍できるよう学生に対するキャリア形成にも力を入れるとともに、卒業後に新たな課題が見つかった時にそれをフォローアップするために、長期にわたる人材のキャリア形成にも取り組む。

(2) 取組の実施体制等 (具体的な実施能力)

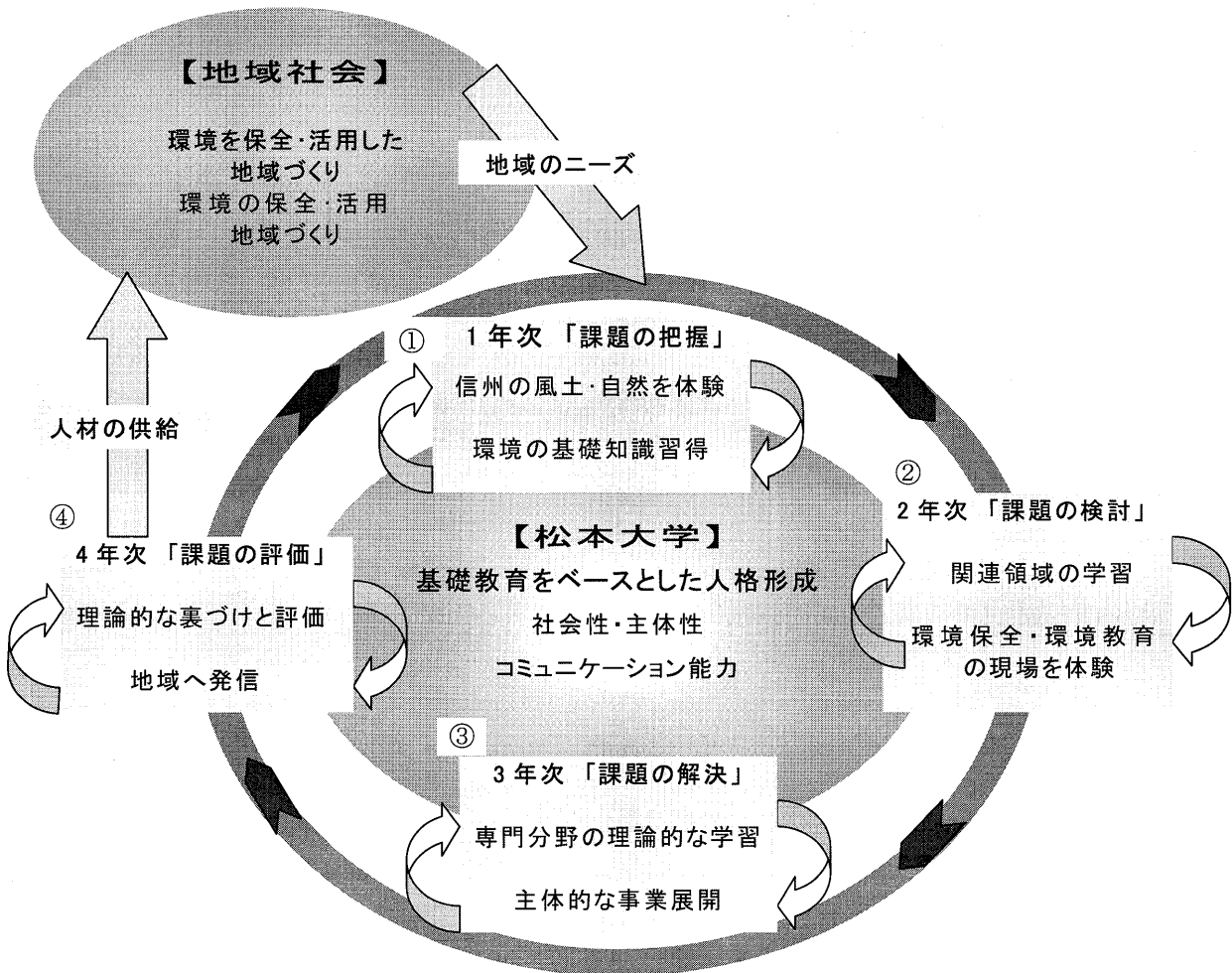
① 環境教育の学習サイクル

本学では、体験と学習を繰り返すというサイクルを重視した教育を展開している。したがって、環境教育の展開においても図1に示すような、松本大学の教育システムを生かした学習サイクルを活用する。これは、

- ① 体験を通じて課題を把握し、学びに対する動機付けによる学習意欲を高め
- ② 基礎知識を習得して課題を検討し、その結果として
- ③ 単なる体験ではなく能動的に課題を解決するために実践活動に参画し、
- ④ その成果を専門教育によって理論的に裏づけ評価する

という学びのサイクルである。サイクルは、本学が長年培った地域とのネットワークを基盤に展開しており、学生の学ぶ意欲を引き出しつつ、必要な知識や能力を習得させる教育手法である。

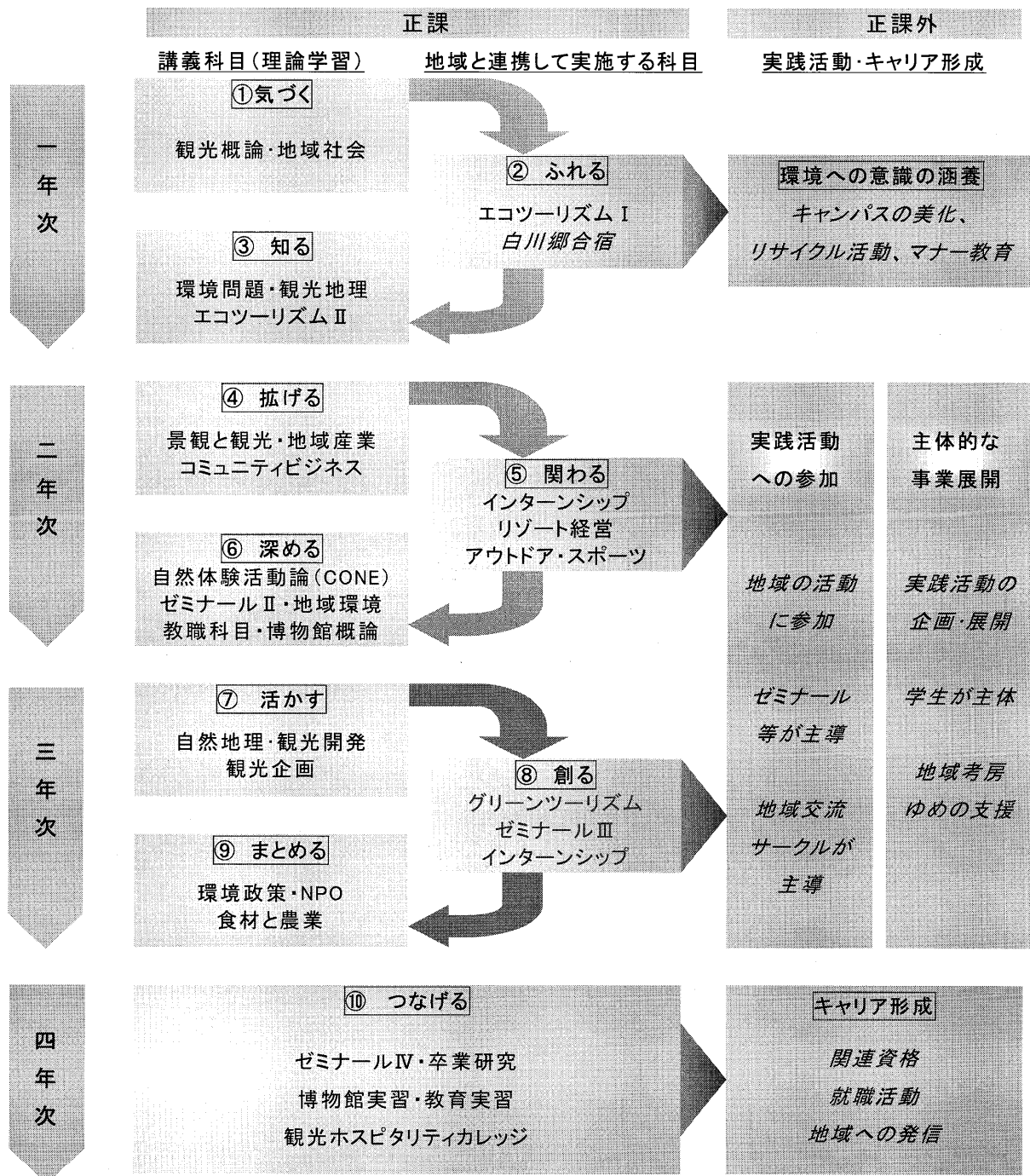
図1 地域と連携した実践的な環境教育の学習サイクル



② 10のステップによる環境教育課程の展開

図1の基本的な学習サイクルを、実際の環境教育に則して図示すれば、図2のようになり、講義科目による理論学習、地域と連携した体験学習という正課のカリキュラムによる流れ（10の学習ステップ）と、正課外の地域と協力して学生が参加・参画する実践活動およびキャリア形成の流れによって展開する。

図2 10の学習ステップによる持続可能な社会をめざす環境教育課程の展開



**1年次** 地域の環境に関わる課題を把握し、環境に対する学生の意識を高めるために、基本的な課題について学び（ステップ①気づく）、「エコツーリズム」（必修）では、大学周辺のアウトキャンパスや白川郷の自然学校における合宿などを通じて、仲間作りや自分の居場所を学びの場につくりつつ、五感を使って自然や環境について体験学習を行う。（ステップ②ふれる）そして、その成果を活かして環境について基本的な知識を習得する。（ステップ③知る）さらに、全学生が環境意識を高めるためことを目的として、キャンパスの美化やリサイクル活動などを学校行事や日常生活の中で行うとともに、意識付けとしてマナー教育を実施する。

**2年次** 地域の環境に関わる課題を検討するために、観光と環境の関連性や関連する領域の知識を習得し視野を広げ（ステップ④広げる）、「インターンシップ」等の実習科目を通じて、地域の環境問題に直接関わる活動や体験に参加する。（ステップ⑤関わる）さらに地域の課題を整理し、「ゼミナールⅡ」等でさらに学習を深める（ステップ⑥深める）自然体験活動指導者を目指す学生には、この時点で自然体験活動リーダーの講座と認定登録ができる。

**3年次** 基礎的な学習の成果を活かし、地域の課題にどう取り組み解決していくために環境や文化の活用を具体的に考え（ステップ⑦活かす）、「ゼミナールⅢ」「グリーンツーリズム」を通じて主体的かつ実践的な課題解決を体験し（ステップ⑧創る）、その成果を「環境政策」等で総括、地域に対して問題提起を行う。（ステップ⑨まとめる）

**4年次** さらにこのような環境教育の展開を卒業後の進路や地域での活動につなげるために、成果をまとめそれを評価し、地域に発信する（ステップ⑩つなげる）とともに、教職や学芸員、自然体験活動指導者のステップアップとして「インストラクター」認定講座などの資格を取得、総合的なキャリア形成を行う。

### ③ 地域における実践活動プログラムの展開

本学では、過去5年間、資料1と資料2に示す実践活動を展開してきた。しかし、これらは教育課程として体系化されず、また一部の教員の取組みに留まっていた。したがって、本取組では、これまでの実績を見直し、教育課程の中に実践活動を位置づけ、全学的な取組みとして推進する。

地域における実践活動プログラムは、「環境教育の人づくり」と「環境活用を通じた地域づくり」の2つのプログラムを設定し、学生が自らの関心によって選択する。2年次では、地域が主体となって実施し、学生が参加する「参加型事業」を中心に、3年次時以降では、学生が主体となって、地域に働きかけて企画・運営する「参画型事業」を中心に実施する。「参加型事業」では、インターンシップの経験やネットワークを活かし、地域が主体的に実施する事業に学生がボランティアによって参加し、教員などが講義やゼミナールなどでのかかわりを発展させて事業に継続して参加する。一方で「参画型事業」では、学生が中心となって地域と協力して企画運営し、財源の確保やマネジメントも学生が主体となって実施する。（資料3参照）これらの活動は、正課における教育の成果を最大限に活かしつつ、さらに専門的に深めるためにゼミナール活動と密接に連携しながら実施する。

### ④ 地域と連携した教育方法

本取組は、松本大学の教育方法である、地域との密接な連携によって展開される。すなわち、「エコツーリズム」をはじめとする正課科目では、キャンパスを飛び出し、地域に実際に出向いて現場から学ぶ「アウトキャンパス・スタディ」や地域の知恵や技術を講義に反映するため、地域の人材をサポート登録し、講義に協力してもらう「教育サポーター制度」、学生が地域や企業の現場で一定期間就業体験を行う「インターンシップ」などを最大限活用する。また、地域の課題をテーマとする「ゼミナール」では、フィールドワークと、専門分野の理論学習を結びつけた活動を展開し、専門的な能力を身に付けた人材を養成する。（資料4参照）

さらに正課外の参加・参画型実践活動では、直接地域の人々や組織と協働して、事業を展開し、

実践活動に学生が参加、参画する。また、地域の求める講座内容と生涯学習へのニーズに応える「公開講座」や高等学校に教員を派遣する。その際、各種分野が広がる高等学校のカリキュラムと大学カリキュラムをつなげる「出前講義」を通じて本取組の成果を地域に発信し、還元する。特に環境教育に関するホームページを新たに立ち上げ、よりきめ細かく地域への情報発信を行う。

これらの地域との連携は、大学と地域をつなぐ仲介役として、平成17年度に開設された地域づくり考房「ゆめ」が、その調整・連絡を行なう。地域づくり考房「ゆめ」は、単に地域のニーズに応えるだけでなく、特に「学生の主体性」を重視したマッチングを行っており、地域に学生の役割を良く認識してもらい、協働共創のまちづくりを進めようとする理念のコーディネート機関でもある。(資料5参照)

#### ⑤ キャリア形成とリカレント教育

本取組のもうひとつの特徴としては、環境教育の成果を活かしたキャリア形成を目指している点である。本学では地域に輩出される人材として3タイプ(P.2参照)のうち、特に②③の人材については、職業として地域の環境保全や活用に携わることが予想される。②の環境を保全・活用する人材については、JAなどの農業振興に寄与する団体・企業や観光業界、食品開発、農産加工などの分野に、就職が想定される。また③の環境教育のリーダーやコーディネーターとしては、学芸員や教員、公民館職員、行政職員、NPOや自然学校のスタッフなど、地域の公共セクターに送り出すことが期待される。(就職実績は資料6参照)

これらの職場で活躍する人材にとって、就職後もマネジメント・スキルや最新の研究成果、政策の動向などは必要であり、卒業生を対照としたリカレント教育を実施する。また、活動情報や新しい関連情報を公開講座やホームページなどで公開することにより、大学が地域へ働きかけて、地域独自の持続可能な社会への意識を啓発し、養成された人材が活躍できる環境や受け皿づくりへ繋げていく。

#### ⑥ 実施体制

取組への参加予定人数(教員20人・職員10人・学生800人)

本取組は観光ホスピタリティ学科を中核として全学的な取り組みとして展開する。中心となるのは、観光ホスピタリティ学科の教員と学生であるが、将来的には、他学部、他学科へもこの取り組みをモデルとして、全学的に環境教育を展開する予定である。

### (3) 評価体制等

本取組においては、以下の3つの観点から評価を実施する。

- ① 大学教育としての妥当性や有効性
- ② 地域へのインパクト
- ③ キャリア形成(有為な人材の育成とその地域での活躍)

①の大学教育としての妥当性や有効性の評価は、学生による自己評価シートによる自己評価、外部評価、就職実績、卒業時の学生アンケート、教員による自己評価シートによる自己評価などをもとに、FD委員会や教務委員会が調査・分析を行って実施する。②の地域へのインパクトに関する評価は、地域づくり考房「ゆめ」が担当し、地域からの連携要請件数、活動件数、地域からの評価(アンケート・評価表)、学生アンケート(卒業時)などによって実施する。③のキャリア形成に関する評価は、就職の実績や卒業生の地域での評価などをキャリアセンターが担当して調査・分析を行う。

それぞれの評価は、定量的、定性的な評価手法を組み合わせを行い、外部評価もあわせて行なう。平成19年度には開始時アセスメント、平成20年度には中間評価、平成21年度には終了時評価を行い、その後も事後評価・モニタリングを継続的に実施し、課題を把握してフィードバックしていく。

#### (4) 教育改革への有効性

##### ① 主体的なリーダーを養成する大学教育のモデル

かつて大学教育は、役人や専門家に代表されるような社会を動かすエリートを養成することを追求してきた。しかし、今大学は、自ら汗をかき、動いて社会を動かすリーダーを養成することが求められている。環境教育についても主体性がキーワードとなっている。したがって、本取組は、大学教育への現代的なニーズの変化を的確に捉え、様々な教育方法や教育課程、地域との連携などを通じて、学習と体験、実践の相互作用によって、自ら主体的に社会に働きかけることのできる人材養成をめざす大学教育のあり方を、環境教育という分野において、モデルとして提起するものである。信州という環境の整った地方で行うことに、成果の独創性・発展性も大きい。

##### ② 大学教育を通じた地域社会の創造

本取組は、大学教育を通じて、地域に必要な人材を輩出するだけでなく、大学が地域に働きかけて、環境を活用した地域社会を創造する取り組みである。したがって、本取組は、地域における環境活用型の産業の創出や、地域住民の活動の拡大など、地域社会を活性化させる効果を持つ。特に環境を活かした農業振興や観光事業の推進など、具体的な展開が期待される。地域ニーズの解決を、大学教育を通じて推進することが本取組の大きな特徴である。

## 2 取組の実施計画等について

前述した取り組みの中で、ここでは正課（講義課目、地域と連携して実施する科目）の年間予定と、加えてそこから発展する実践的な地域活動教育（実践活動・キャリア形成）の計画について述べる。これらを丁寧に実践しながら、社会にその進捗状況をインターネット等でPRし、知的財産を公開することで地域に最新情報・起業アイデア等を発信、それにより、人材の受け皿づくりを行う。

### ① 正課の取り組み

(毎年)	1年	各科目における講義とアウトキャンパス・スタディ 白川郷合宿（必修） サポーターによる講義 キャンパスにおける環境啓発活動
	2年	各科目における講義とアウトキャンパス・スタディ ゼミナールⅡ・Ⅲ インターンシップ（体験型）
	3年	各科目における講義とアウトキャンパス・スタディ エコツアー合宿 ゼミナールⅣ・Ⅴ インターンシップ（就業体験、主体的関わり） 各種実習（博物館、自然体験活動、福祉施設）
	4年	各科目における講義とアウトキャンパス・スタディ ゼミナールⅥ 自然体験活動コーディネーター講座 卒業研究

### ② 実践活動

#### A 環境教育の人づくり「インタープリター（自然案内人）実践講座」

大学カリキュラムと連動して、周辺の自然学校・地域のNPOに学生を派遣し、OJTを行う。また、学生の実体験を補う実践活動として、自主活動としての「スローライフ研究会」を設立、大学周辺での廃材を使った小屋作りや田畑づくりを通して、地域の人に教えを請い、自然とともに暮らすための力を身につける活動を行う。（詳細は資料3）

平成19年度 学生の自然学校等の派遣、土地の借り上げ、学生との作業計画・作業開始

平成20年度 学生の自然学校等の派遣、大学指導内容の見直し、作業継続・発展

平成21年度 学生の自然学校等の派遣、作業継続・評価・継続

#### B 環境活動を通じた地域づくり

環境保全・活用型の事業を松本・安曇野を対象地域として、地域の行政や住民と協力して、実施する。初年度は地域が実施する事業に参加してOJTを行なう。遊休農地の活用など農業の振興や自然を活かした観光の振興、市街地における都市環境の整備等が、テーマとなる。次年度以降は、OJTを継続しつつ、学生が事業の企画立案を自ら行ない、順次実施していく。OJTや事業実施は、ゼミナール活動の一環として、あるいは地域づくり考房「ゆめ」の事業として展開される。

（詳細は資料3）



- 平成19年度 学生の既存の地域づくり事業等でのOJT、課題の把握と整理、事業の提案  
 平成20年度 学生による地域づくり事業の企画、大学指導内容の見直し、OJTの継続  
 平成21年度 学生の地域づくり事業の実施、事業の継続・評価・継続、OJTの継続

### ③ 評価と情報発信

- 平成19年度 開始時アセスメント  
 実習講座に関するホームページ・ブログの開設、発信  
 第1回グリーンツーリズム・シンポジウムの開催  
 卒業生対象リカレント講座の開催（一般公開）
- 平成20年度 ホームページ・ブログによる知的情報の発信  
 第2回グリーンツーリズム・シンポジウムの開催  
 卒業生対象リカレント講座の開催（一般公開）  
 中間評価
- 平成21年度 中間評価・報告事業  
 第3回グリーンツーリズム・シンポジウムの開催(成果報告)  
 卒業生対象リカレント講座の開催（一般公開）  
 正規カリキュラム修了卒業生輩出  
 終了時評価
- 平成22年度以降（GP終了後）  
 卒業生対象リカレント講座の開催（一般公開）  
 カリキュラムの実践は大学経営の中で、発展的に継続  
 モニタリング調査およびGP終了後5年目に事後評価を実施

### ④ 実施体制

本取組の主体は、観光ホスピタリティ学科および地域づくり考房「ゆめ」である。本取組は、正課と正課外、大学と地域のそれぞれ両方にまたがるため、その調整がきわめて重要であり、全学的な組織が協力する必要がある、またそれをとりまとめる調整機関が必要となる。したがって、実際の推進・調整機関としては、教員と事務職員10名程度によって構成される環境教育推進委員会を設置し、教務課と地域づくり考房「ゆめ」が合同で事務局を構成する。

また、学生委員会・学生課（学生自治会やサークルとの連携の推進）、教職センター（教員養成における環境教育の導入、地域教育活動との連携）、キャリアセンター（取り組みの成果を活かした就職支援と卒業後のフォローアップ）、国際交流センター（成果をいかした国際協力の推進）、FD委員会（取り組みの評価やそれを活かしたカリキュラム開発）など全学の組織が協力して本取組を推進していく。

（様式4）

3 「データ、資料等」

資料1 現在の主な実践活動実績 (○:参加型事業、▲:参画型事業)

実践活動は、意識の啓発、環境の活用、環境教育の実践の3つのテーマで区分した。

	テーマ	活動内容	実施団体等
○	意識啓発	ペロタクシーの運行体験	(特活) 人にやさしい街づくり推進協議会
▲	意識啓発	廃食油燃料車によるエコ旅	中澤ゼミナールの活動の一環
○	意識啓発	景観住民協定策定協力	松本市・田川地区
○	環境活用	低農薬による稲作体験	JA松本ハイランド青年部
○	環境活用	そば栽培と蕎麦店の運営	農事法人竹田の里・(株)いばらん亭
○	環境活用	松本市の特産一本ねぎの普及	JA松本市女性部
○	環境活用	安曇野のグリーンツーリズム	安曇野のグリーンツーリズムを考える会
▲	環境活用	松本市街地タウンマップ作成	白戸ゼミナールの活動の一環
○	環境教育	山村留学における体験	(特活) グリーンウッド自然体験センター
○	環境教育	自然体験施設での研修	国営アルプス安曇野公園
○	環境教育	乗鞍高原での自然学校	(特活) エヌエスネット
○	環境教育	自然学校における研修	ホールアース自然学校
○	環境教育	総合的な学習の時間の外部講師	木祖小学校・大町北高校
○	環境教育	博物館実習	松本市

資料2 実績に関わる新聞報道 (信濃毎日新聞 2006年9月19日)

## てんぷら廃油燃料ぐるり西日本



# エコカー14600キロ「完走」

使用済みのてんぷら油を燃料に走る「エコカー」で西日本を巡る旅に出  
 ていた松本大学(松本市)の学生が十九日、二十日間、約四千六百キロの  
 旅を終え、同大に帰った。大学前には「完走おめでとう」と書かれた横断  
 幕を掲げた大学職員や学生約二十人が出迎え、労をねぎらった。

観光ホスピタリティ学  
 科のゼミで学ぶ二、三年  
 生四人が、学生時代にし  
 かできないことをしたい  
 と企画。廃油再利用を  
 推進する長野市の団体か  
 ら借りたディーゼル車で  
 八月二十八日同大を出  
 発した。往路は北陸、山  
 陰地方を巡って九州に入  
 り、鹿児島で折り返し。  
 復路は瀬戸内側を通って  
 大阪、静岡、山梨経由で  
 松本市に戻った。

旅先では、自然学校や  
 廃油利用に取り組む企  
 業、大学などを訪問し、  
 到着した「エコカー」を  
 学生や職員が出迎えた

### 松本大生 旅先で紹介活動も

エコカーの紹介もしてき  
 た。所属ゼミの講師の知  
 り合いなどから燃料とな  
 る廃油を提供してもら  
 い、走り続けた。

滋賀県東近江市では菜  
 種油の廃油を、燃料など  
 としてリサイクルする同  
 市の菜の花エコプロジ  
 エクトの関連施設を見  
 学。リーダーを務めた下  
 川智彦さん(20)は「三年  
 は市全体で廃油の回収  
 率が高く、感動した」と、  
 一番の思い出に挙げた。

この日、下川さんは大  
 学前の歓迎ムードに驚い  
 た様子で「うれいし半面  
 恥ずかしい」。立ち寄っ  
 た県内のコンビニエンス  
 ストアで自分たちの取り  
 組を知る人から声を掛  
 けられた。廃油利用に関  
 心を持ってもらえたと  
 旅の手土産を語ってい  
 た。

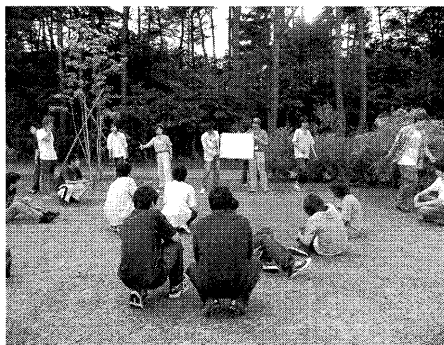
今後、旅の記録や車の  
 走行状況などをまとめた  
 月十四、十五日の大学祭  
 で報告を開く予定だ。

## 資料3 実践活動プログラム

## A 環境教育の人づくり「インタープリター（自然案内人）実践講座」

自然学校やNPOに学生を派遣し、事業者のもとでOJTを行う活動であるが、同時に参加する一般の子どもたちに対して、事業者が自然体験型環境教育プログラムを安価に提供できるメリットも生まれる。OJTは実社会のニーズと直面した緊張感のある環境で、最も効果的に指導者を養成する学びの場であり、派遣から評価までの指導は厳密に行う。現在、上高地ナショナルパークガイド、乗鞍高原アウトドアサポートシステムズ、安曇野シャロムヒュッテ、泰阜村グリーンウッド自然体験センター等と連携し、大学のカリキュラムと連動して学生の受け入れを始めている。

また、「スローライフ研究会」は、平成18年度に7名の学生が発起人となり、1名の教員とともに現在活動を計画中であり、農業組合との協力で農地の確保を行っている。田んぼや畑の耕作、廃材を使った小屋作りを地域の人に教わりながら、手作業での活動となる。学生にとって何もない状態からものを作るというパイオニア精神あふれる活動は、臨機応変な動きが要求され、困難もあるだろうが、学生たちの主体性・応用力など総合的な学びについて大きな効果が期待できる。学生には関わり方について求めるが、成果については求めない。この活動は専門課程を選択した学生だけでなく、希望する学生に活動参加を促し、自主性を重んじながら展開する予定である。



左) 環境教育プログラム研修

右) ネイチャーゲーム指導員講座  
(資格取得)

## B 環境活動を通じた地域づくり

大学のカリキュラムと連動し、アウトキャンパスやインターンシップなどで事業に参加し、ゼミナールなどで事業を企画・立案し、最終的には学生が主体的かつ自主的に事業を行なう。フィールドとなる松本・安曇野地域には、様々な学びの機会やテーマが豊富にあり、学生の関心興味に沿って、多様な事業を学生が提案し、実施していく。その成果は常に理論学習にフィードバックし、ゼミナールなどでの学習の素材として活用する。

農業振興では、遊休農地の活用を最重要なテーマとして掲げ、農業の担い手を支援する「駅前のクラインガルテン事業」及び農産物に付加価値をつけ、農業者のインセンティブを図る「特産品開発事業」を実施する。「駅前のクラインガルテン事業」は、新規就農を希望する団塊の世代を対象として、松本駅西口駅前に、空き家を整備し農村に慣れるまでの滞在施設として貸し出す事業である。地元の町会による街づくり事業及び受け入れ先の松本・安曇野の行政と連携して実施する。観光振興では、安曇野の滞在型観光を模索する「安曇野観光振興プロジェクト」を実施する。本学が長年取り組んでいる滞在型の観光振興のネットワークを活かして、宿泊施設や体験施設でOJTを行ない、学生が企画立案したイベントや観光プログラムを企画・運営する。都市環境の整備は、松本市街地を対象として、環境改善に取り組む事業にOJTで学生を派遣し、その成果を活かして、学生の自主的な事業を実施する。ベロタクシーなどの環境調和型の都市交通の普及や地下水が豊富な松本の水環境整備など、「環境にやさしい松本づくり事業」を実施する。



もち米を売る学生たち

松本市新村の松本大学 観光学科 朝市で笑顔の販売

松本市新村の松本大学 観光学科 朝市で笑顔の販売

長)が開いた朝市で、自分たちが栽培した新村産のもち米を販売した。新村の米のブランド化や、米を使った特産品の開発を目指して授業で取り組みを行っているプロジェクトの

一環で実施。用意した約二十キロのもち米は三十分足らずで売り切れた。お客さんの喜ぶ顔が人か二十一日、JR松本 駅西口周辺で地元市上西町会(筒井敏男町会) 栽培した米を売った。一

年生の平林敬昭さん(21)は「売れ行きが良く驚いた。お客さんの喜ぶ顔が見られるのもうれしい」と話していた。

朝市には、学生らが市内の総菜店の協力を得て手作りした松本一本ネギを使った野菜まんじゅうのほか、奈川の山菜、梓川のキノコ、花の苗なども並び、にぎわった。

学生の自信作 新村米

松本大学 観光学科 朝市で笑顔の販売

市民タイムス 2006年5月22日

資料4 地域と連携した教育システムの実績

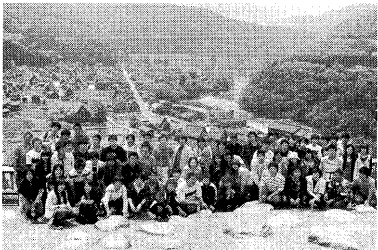
- ・ アウトキャンパス・スタディの利用  
通常講義・ゼミナールにおける学外講義(演習・資格実習含む)  
実績)平成18年度 実施件数 220件/学生延べ3,735名参加
- ・ サポーター登録状況(平成18年度)  
実績)平成18年度 登録人数30名/登録者全員活用



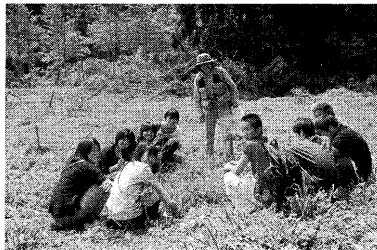
上左)「グリーンツーリズム」  
田植え体験



上右)「食材と農業」  
りんご収穫作業と  
土の性質について  
(サポーターの説明)

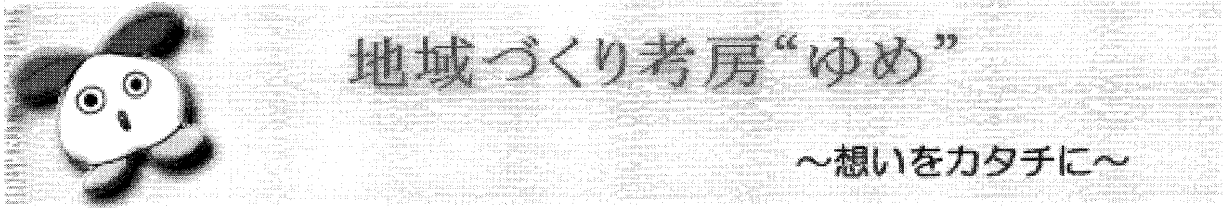


下左)「エコツーリズムⅠ」  
高山合宿研修  
白川郷合掌集落にて



下右) 同高山合宿研修  
エコツアー体験

資料5 地域づくり考房「ゆめ」について（松本大学ホームページより）

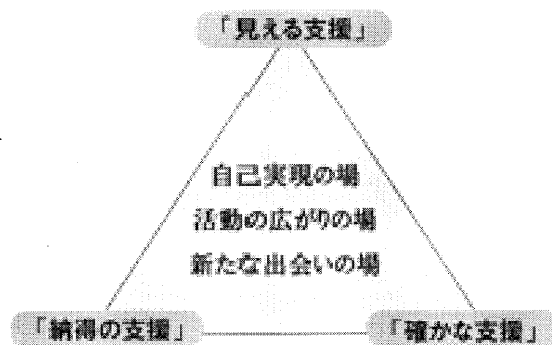


つながる人、想い

学内外

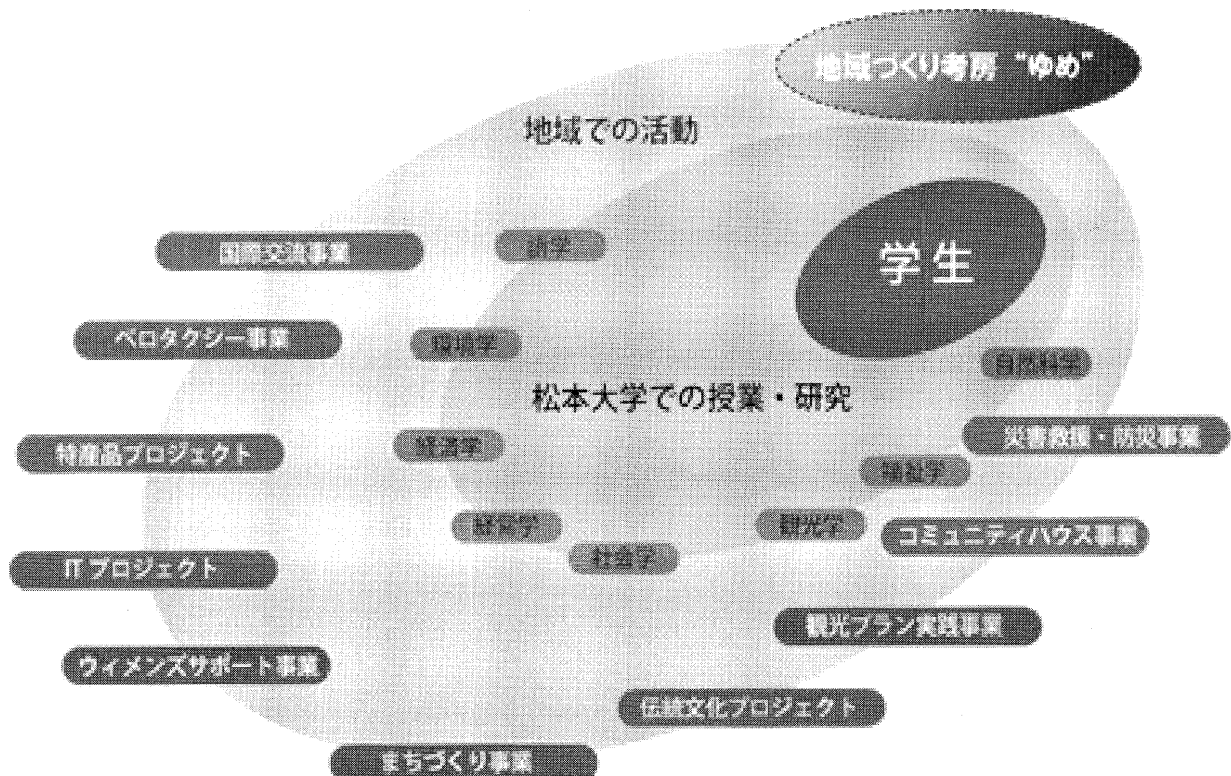
世代を超えてたくさんの人と出会い、  
楽しくふれあい、  
想いをカタチに変えていくところです。

- 地域のネットワークの中で活動しています
- ◆ みんなにやさしいまちづくりを考えるところ
- ◆ 何かしたいと思っている人を支援するところ
- ◆ 学生・地域・教職員がつながるところ
- ◆ 視覚情報を集め・発信するところ
- ◆ 講座・研修会・つどいに参加できるところ
- ◆ みんなで自由に自主的に交流するところ
- ◆ 活動をしたい人と求める人が出会えるところ



自分の好きなことや特技を生かして、また一人ひとりの興味・関心事や問題を起点として、ともに考えあいながら「自分のできること」で行動していきます。

地域づくり考房「ゆめ」は、学生や地域のニーズの『芽』を『結』び『夢』につなげていけるように、そして『遊』びの心を忘れない『眼』を持って活動ができるように、そんな想いがカタチになった場所です。



## ミッション

- ① 地域づくりの活動を通して学生の「地域人」教育を進める
  - ・教育的視点をもって学生の活動を推進する
  - ・学生たちの創造性・自主性・主体性を重視した活動を支援する
  - ・市民としての生き方を学ぶ機会を提供し、地域と協働した活動を支援する
- ② 大学における学問と「地域人」教育を結びつける
  - ・アカデミックな学問と活動を結びつける
  - ・関連科目を支援する
  - ・学生の想いと地域の想いを対等につなげ、地域と連動した活動に向け総合的に支援する
- ③ 大学の社会貢献を推進するとともに大学の価値を高める
  - ・研究機関としての活動をサポートする
  - ・教職員と連帯しながら、学生の活動を推進していく



## 地域づくり考房"ゆめ"

平日 月曜日から金曜日 10:30~18:30

松本大学内2号館 TEL.0263-48-7213 FAX.0263-48-7216

E-mail:community@matsu.ac.jp

## 資料6 環境教育の成果を活かした就職実績

環境教育の成果を活かし、卒業後地域社会の中で活躍することは、本取組の大きな目標である。  
平成17・18年度における環境教育の成果としての就職実績は次の通りである。

平成17年度卒業生		平成18年度卒業生	
<b>■農業協同組合(8名)</b>		<b>■農業協同組合(5名)</b>	
長野県厚生農業協同組合連合会	1	上伊那農業協同組合	1
あづみ農業協同組合	3	北信州みゆき農業協同組合	1
北信州みゆき農業協同組合	1	グリーン長野農業協同組合	1
信州うえだ農業協同組合	1	塩尻市農業協同組合	1
ながの農業協同組合	1	松本市農業協同組合	1
松本ハイランド農業協同組合	1		
<b>■農業系卸会社(6名)</b>		<b>■農業系卸会社(2名)</b>	
(株)アセラ	1	(株)アセラ	1
(株)ナカツタヤ	2	(株)長野クボタ	1
(株)長野クボタ	3		
<b>■観光・ホテル(4名)</b>		<b>■観光・ホテル(8名)</b>	
近畿日本ツーリスト(株)	1	(株)安達・グリーンワールド	1
(株)東急リゾートサービス	1	エプソン日新トラベルソリューションズ(株)	1
東洋観光事業(株)ホテルブエナビスタ	1	近畿日本ツーリスト(株)	1
(株)星野リゾート	1	東洋観光事業(株)ホテルブエナビスタ	2
		リゾートトラスト(株)	1
		(株)リゾートリンクス	1
		(株)萬隆旅行	1
<b>■食品製造(2名)</b>		<b>■食品製造(2名)</b>	
ゴールドパック(株)	1	(株)伊藤園	1
名古屋製酪(株)	1	信州ミルクランド(株)	1